

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：13103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04550

研究課題名(和文)健康障害児における自尊感情の発達と支援プログラムの検討

研究課題名(英文)Self-esteem and Intervention for Children with Health Impairments

研究代表者

八島 猛(Yashima, Takeshi)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：00590358

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は健康障害児における自尊感情の発達と影響要因を事例的な検討に基づいて明らかにすることであった。研究期間中に健康障害児同士が課題学習を行う「交流教室」を概ね1ヶ月に1回の頻度で3年間開催した。2016年度以降は参加者の疾患特性に応じて教科学習指導を行う「学習教室」を概ね1週に1回の頻度で2年間開催した。これらの活動を通して、参加者による課題遂行と遂行結果の内省を促す指導支援が自尊感情の維持と改善に有効であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：Clinical studies were conducted to clarify the development of self-esteem of children with health impairments and factors which affect it. First three years, a group session was held in which these children perform tasks together once a month. Following two years, we organized a "Study Group" to provide subject guidance according to the characteristics of each child's illness once a week. As a result, it was suggested that interventions that encourage children with health impairments to accomplish their tasks and introspection on the results of their accomplishments are effective in maintaining or improving the self-esteem of children with health impairments.

研究分野：特別支援教育

キーワード：自尊感情 コンピテンス 重要度評価 支援方法 特別支援教育 健康障害児

1. 研究開始当初の背景

健康障害児における自尊感情の高さは、将来的な治療管理の継続やストレス対処能力の高さなど、望ましい予後と関連がある。一方で、健康障害児の自尊感情は一般集団よりも低く、青年期において低下し続けるとの指摘があり、近年では自尊感情に対する介入研究が報告されるようになってきた。

これらの研究の結果は、健康障害児の自尊感情が介入によって改善可能であることを示している。しかしながら、介入研究で使用された支援プログラムは複数の要素から構成されており、自尊感情の改善に影響を及ぼす要因については十分に検討されているとは言いがたい。自尊感情の維持または改善の影響要因の解明は、より効率的かつ効果的な自尊感情支援プログラムの開発に役立つことが期待される。

2. 研究の目的

本研究の目的は、健康障害児を対象とする臨床研究をとおして、自尊感情の発達特性を事例的に明らかにすること、自尊感情の影響要因を考慮した支援プログラムを作成して、対象者に適用し、その効果を事例的に検証すること、これらの結果に基づいて自尊感情の発達に影響を及ぼす要因と有効な支援方法について検討することである。

3. 研究の方法

(1) 自尊感情の発達特性と影響要因に関する情報収集：研究者と大学院生の補助の下に、健康障害児同士が課題学習を行う「交流教室」を1か月に1回、1回約150分間の頻度で開催する。その中で、健康障害児とその保護者に対して自尊感情に関する調査を継続的に行う。

健康障害児に対する質問紙調査として、自己評価尺度(八島・大庭・葉石・池田, 2017)を用いる。この尺度は子供の自己評価を自尊感情、5領域のコンピテンス(学業、友人、運動、外見、行動)、同5領域の重要度評価の3側面から評価できる。各下位尺度の得点が高いほどその領域における自己評価は肯定的または重要性が高いことを示す。

健康障害児とその保護者に対する面接調査では、参加者の疾患特性、家庭と学校における生活状況及び支援ニーズに関する情報収集を行う。

(2) 自尊感情支援プログラムの作成：健康障害児に対する情報収集の結果と Harter (1999) の自尊感情の決定要因に関するモデルを参考として、健康障害児とその保護者のニーズに応じた自尊感情支援プログラムを作成して、健康障害児に適用する。

(3) 自尊感情支援プログラムの効果検証：支援プログラムの効果は、健康障害児とその保護者に対する調査に基づいて検証する。具体的には支援プログラムの適用前後(当該学年の1学期と3学期)における参加者の自尊

感情得点を比較する。また、支援プログラムの遂行状況を確認し、支援プログラムを継続して実施する際の健康障害児とその保護者の負担感について聴取する。

4. 研究成果

(1) 平成27年度：「交流教室」を1か月に1回、1回約150分間の頻度で開催した。健康障害児6名の参加登録があり、そのうち、1学期と3学期に自己評価尺度を適用できた参加者は小学6年生から中学3年生までの女子3名と男子2名の合計5名であった。

参加者の自尊感情得点の変化については、1学期から3学期にかけて、自尊感情得点が低下したものが3名、自尊感情得点が維持されたものは2名であり、この期間に得点上昇が認められたものはいなかった。自尊感情得点が低下した3名はいずれも女子であり、維持された2名はどちらも男子であった。また、測定時期にかかわらず、男子2名は女子3名よりも自尊感情得点が高かった。

5領域のコンピテンス得点の変化については、相対的に行動領域のコンピテンス得点が高く、学業と運動領域のコンピテンス得点が高かった。友人と外見領域のコンピテンス得点には個人差があった。

5領域の重要度評価については、相対的に学業と行動領域の重要度評価得点が高く、友人と運動と外見領域の重要度評価得点には個人差があった。

以上のことから小学6年生から中学3年生までの参加者の自己評価の発達特性として、自尊感情の発達には性差があること、女子よりも男子の自尊感情の方が高く維持されやすいこと、女子の自尊感情は年度内に低下し得ること、学業領域のコンピテンスは相対的に低いにも関わらず、この領域の重要度評価は高いことが示唆された。

参加者とその保護者に対する面接調査の結果から、参加登録者のうち、半数以上に学業面の課題と対人面の課題があることが明らかとなった。学業面の課題の具体的な内容として、「学年進行に伴い、学習内容を理解することが困難になった」「学校の宿題が1人で行えず、毎回保護者の支援を必要とする」「テスト前の学習方法がわからない」などの意見が聞かれた。また、診断書や過去に実施された心理検査の結果から、これらの学習面の課題の背景には、学習を困難にする認知特性の存在が伺われた。対人面の課題の具体的な内容として、「クラスの友人に気持ちを伝えることができない」「友人をつくれぬい」「緊張により必要なことでも先生や友人に質問できない」などの意見が聞かれた。

(2) 平成28・29年度：「交流教室」は前年度と同じ頻度で継続して開催した。平成29年度途中から健康障害児3名が参入し、この教室の最終的な参加登録者数は9名になった。また、平成28年度からは研究者または大学院生が指導者となって教科学習指導を行う

「学習教室」を概ね1週に1回開催した。これは、「交流教室」に参加した健康障害児の多くが学業面に課題と支援ニーズがあったこと、また、参加者の学業領域における重要度評価が相対的に高かったこと、そして、重要な領域におけるコンピテンスは自尊感情の形成と変容に寄与すること(Harter, 1999)によるものである。

「学習教室」には健康障害児5名の参加登録があり、そのうち、継続的な指導を実施し、かつ自己評価尺度等による事前事後調査を当該学年の1学期と3学期に実施できた参加者は小学6年女子、中学3年女子、中学1年男子の3名であった。

自尊感情支援プログラムの作成に先立ち、「学習教室」の参加者とその保護者から教科学習の習得状況と認知特性に関する情報を聴取して整理した。その結果、「学習教室」の参加登録者は疾患の主徴に併せて、学習を困難にする認知特性を有していることが確認された。また、学校生活における自覚的な困難さとして「授業時間内に学習内容を理解できない」「宿題やテスト勉強などの家庭学習ができない」という回答が共通して認められ、これらの内容は平成27年度の調査結果と概ね一致していた。そこで、対象者に共通の自尊感情支援プログラムの支援内容として認知特性に応じた学習内容の指導と家庭学習を促進するための指導を考案して適用した。

指導の概要は次の通りである。「学習教室」では、指導者が参加者の認知特性に応じた教科学習指導を実施する。当日行われた学習内容と同じ、または類似した問題が掲載されたワークブックを作成し、参加者の家庭学習として配布する。参加者は1週間後の「学習教室」にワークブックを持参して、遂行状況を指導者と共に確認する。その上で、参加者はワークブックに出題された問題の中から、10問を抽出して作成された確認テストを行い、指導者と共に正誤を確認する。「学習教室」終了時には、当日の学習内容の要点について内省の機会を設けるといふものである。

なお、認知特性に応じた指導の具体例として、視覚的な情報の処理に困難を有する参加者に対して、学習内容を説明する際に、指導者の実演と音声言語による詳細な説明を行う、上肢に動作緩慢のある参加者に対して、ホワイトボードの使用による書字、計算練習を促すまたは指導者の代筆による学習を行う、ケアレス・ミスによる誤答が多い参加者に対して、自分で声を出す、指でなぞるなどの確認方略の使用を促す、苦手意識のある学習内容を指導するにあたり、参加者と指導者との競争場面を設けるなどゲーム的な要素を取り入れる、などの指導を実施した。

また、毎回の学習場面においては、指導者の補助の下に参加者自身による解答練習の機会を設けて、学習内容の習得に対する反復練習の成果をフィードバックした。

ワークブックの確認については、回答の正誤よりも、毎日、継続してワークブックを遂行していることを承認、賞賛した。なお、ワークブックの遂行量は、参加者自身が自己決定することにした。

確認テストについては、得点をグラフ化するとともに、ワークブックの遂行量も提示して、ワークブックの遂行量が確認テストの得点に関連することをフィードバックした。

内省の機会については、当日の「学習教室」において使用した学習プリント等を提示しながら、参加者の学習の遂行状況及び学習態度を肯定的にフィードバックした。

以上の支援を行った結果、ワークブックを中心とした支援プログラムの遂行状況については、小学6年生女子はほとんど遂行できなかったが、中学1年男子と中学3年女子においては、家庭学習として定着し、体調不良等の特別な事情がない限りにおいて、毎日継続して遂行することができるようになった。

自己評価尺度得点の指導前後の比較においては、自尊感情得点が維持されたものは小学6年女子と中学1年男子、上昇したものは中学3年生女子であり、自尊感情得点が低下したものはいなかった。

参加者とその保護者との面接調査においては、参加者から「自分で勉強できるようになった」「ワークブックはがんばった」「学校の宿題も提出できた」「家庭学習は毎日できた」など、遂行に対する努力と達成に関する回答が得られた。また、保護者から「学習教室に行くことを毎週楽しみにしている」「ワークブックは保護者にみえる場所(居間、台所など)で、得意そうにやっている」「ワークブックはもちろん、学校の宿題も支援なしに行うようになってきた」など、参加者における学習の自律を伺わせる回答が得られた。なお、参加者とその保護者の両者において支援プログラムの継続に対する負担感は認められなかった。

以上の結果から、本研究における教科学習指導をとおして行われた自尊感情支援プログラムは健康障害児の自尊感情の維持または改善に一定程度の効果が認められるものであり、教科学習指導は参加者の学習の自律を部分的に促すものであったと考えられる。

今回行われた自尊感情支援プログラムの要点は、参加者にとって重要な領域における参加者自身の努力と遂行を促し、内省の機会を設けて、その結果を参加者自身が肯定的に捉えることができるように、指導者が肯定的なフィードバックを行うということに集約される。Harter(1978; 1999)によると、特定の領域における子供の遂行とその結果に対する成功または失敗の自己判断および重要な他者からの評価的なフィードバックがその領域に対するコンピテンスに寄与するとともに、重要な領域におけるコンピテンスは自尊感情の形成と変動に影響を及ぼすことが報告されている。本研究の結果はHarter

の知見の有効性を臨床研究に基づいて検証したものであり、健康障害児を対象とした支援内容としても、認知特性等、個々の状態に応じた配慮がなされることを前提として、有効であることを示唆している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

八島猛, 大庭重治, 青年初期における自己評価の発達と機能に関する縦断的研究, 育療, 査読有, 62, 2017, 1-11

八島猛, 大庭重治, 葉石光一, 池田吉史, 青年初期における自己認知の発達に関する横断的研究 - 自尊感情, コンピテンス, 重要度評価の観点から -, 上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要, 査読無, 23, 2017, 79-85

村上由則, 大江啓賢, 菊池紀彦, 八島猛, 特別支援教育専攻学生を対象とした障害理解のための教材開発(5) てんかんの理解を中心にした教材, 宮城教育大学特別支援教育総合研究センター研究紀要, 査読無, 11, 2016, 23-33

大庭重治, 八島猛, 池田吉史, 葉石光一, 大脳性視覚障害児の発達支援における特性評価, 上越教育大学研究紀要, 査読無, 36(1), 2016, 117-124

村上由則, 八島猛, 大江啓賢, 菊池紀彦, 特別支援教育専攻学生を対象とした障害理解のための教材開発(4) 人工透析メカニズムおよび腎臓疾患を中心にした教材, 宮城教育大学特別支援教育総合研究センター研究紀要, 査読無, 10, 2015, 49-61

大庭重治, 池田吉史, 八島猛, 葉石光一, 子どもの大脳性視覚障害と教育実践的支援における諸課題, 上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要, 査読無, 21, 2015, 15-19

[学会発表](計6件)

八島猛, 野口和人, 大庭重治, 神経線維種症1型の生徒に対する数学の学習指導効果 学習の持続性, 学業成績, 自己評価の観点から, 日本特殊教育学会第56回大会, 2018年9月22日~9月24日, 大阪国際会議場(大阪府・大阪市)

百瀬翔悟, 八島猛, 脳性麻痺のある1生徒における数学科の自己調整学習支援, 日本特殊教育学会第55回大会, 2017年9月17日, 名古屋国際会議場(愛知県・名古屋市)

八島猛, 児童・青年期における自己認知

の発達的变化, 日本育療学会第20回学術集会, 2016年8月27日, 宝塚大学大阪梅田キャンパス(大阪府・大阪市)

村上由則, 大江啓賢, 菊池紀彦, 八島猛, 特別支援教育専攻学生を対象とした障害理解のための教材開発 - その5 てんかんの理解を中心にした教材, 日本特殊教育学会第53回大会, 2015年9月21日, 東北大学川内北キャンパス(宮城県・仙台市)

八島猛, 大庭重治, 病弱児における自尊感情の発達の特徴とその支援, 日本特殊教育学会第53回大会, 2015年9月19日, 東北大学川内北キャンパス(宮城県・仙台市)

八島猛, 大庭重治, 精神及び行動の障害のある児童生徒における自己認知の発達の特徴, 日本育療学会第19回学術集会, 2015年8月23日, 東洋大学白山キャンパス(東京都)

[図書](計5件)

八島猛, 北樹出版, わかりやすく学べる特別支援教育と障害児の心理・行動特性, 2018, 211(127-137)

八島猛, 上越教育大学出版会, 「実践力」が育つ教員養成 - 上越教育大学からの提言4 -, 2018, 245(239-242)

八島猛, 「思考力」が育つ教員養成 - 上越教育大学からの提言3 -, 上越教育大学出版会, 2018, 277(269-272)

[その他]

八島猛, 病弱者における自尊感情の発達特性について, 新潟県特別支援教育研究会 肢体不自由・病弱・身体虚弱担当者研修会(招待講演), 2017年8月4日, 見附市立今町小学校(新潟県・見附市)
棟方智美, 文章読解に困難を示す1児童における要因分析と指導に関する研究, 上越教育大学大学院・学校教育専攻・院生, 2017年度修士論文, 2018
百瀬翔悟, 脳性麻痺のある生徒を対象とした認知特性に基づく数学科における自己調整学習の支援に関する事例的研究, 上越教育大学大学院・学校教育専攻・院生, 2016年度修士論文, 2017

6. 研究組織

(1) 研究代表者

八島 猛 (YASHIMA, Takeshi)
上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
研究者番号: 00590358

(2) 研究分担者

大庭 重治 (OHBA, Shigeji)

上越教育大学・その他部局等・理事兼副学
長

研究者番号：10194276

野口 和人 (NOGUCHI, Kazuhito)

東北大学・教育学研究科・教授

研究者番号：40237821

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

棟方 智美 (MUNAKATA, Satomi)

上越教育大学・大学院学校教育専攻・院生

百瀬 翔悟 (MOMOSE, Shogo)

上越教育大学・大学院学校教育専攻・院生